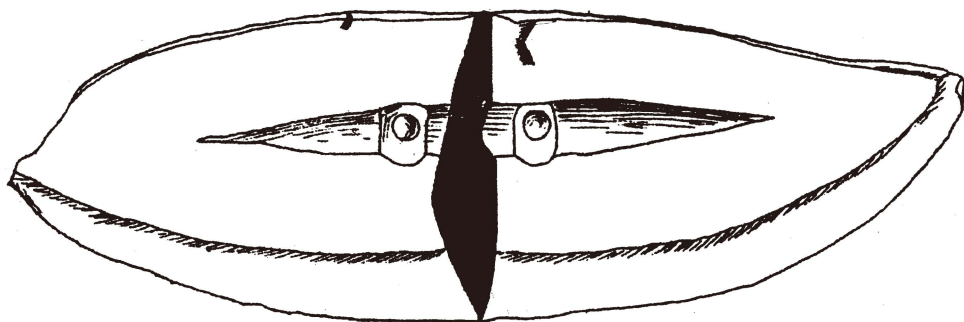




旧練兵場出土石庖丁 実大

三 遺 物

採集した遺物は図の様な打製石斧1個と弥生式土器片、斎釜土器片である。

弥生式土器は甕形であってやや大きな破片もあった。器形は口縁部上面が発達し平坦となって外側へ張り出しており、頸部にも凸帯を附している。口縁部外側及凸帯には浅い刻目を施している。質は粒子が細かで雲母粉を混じたものもあり焼成は良好である。一の宮下層の土器や東昌寺の土器に類似している。

斎釜はごく少量でまとまった形のものがなかった。

四 結 び

この遺蹟は弥生式の時代のものであるがついに包含層は発見することが出来なかった。石庖丁と打石斧と弥生式土器とは恐らく一つの組み合わせを成すものであろうが、地上探蒐であるから断定することは出来ない。

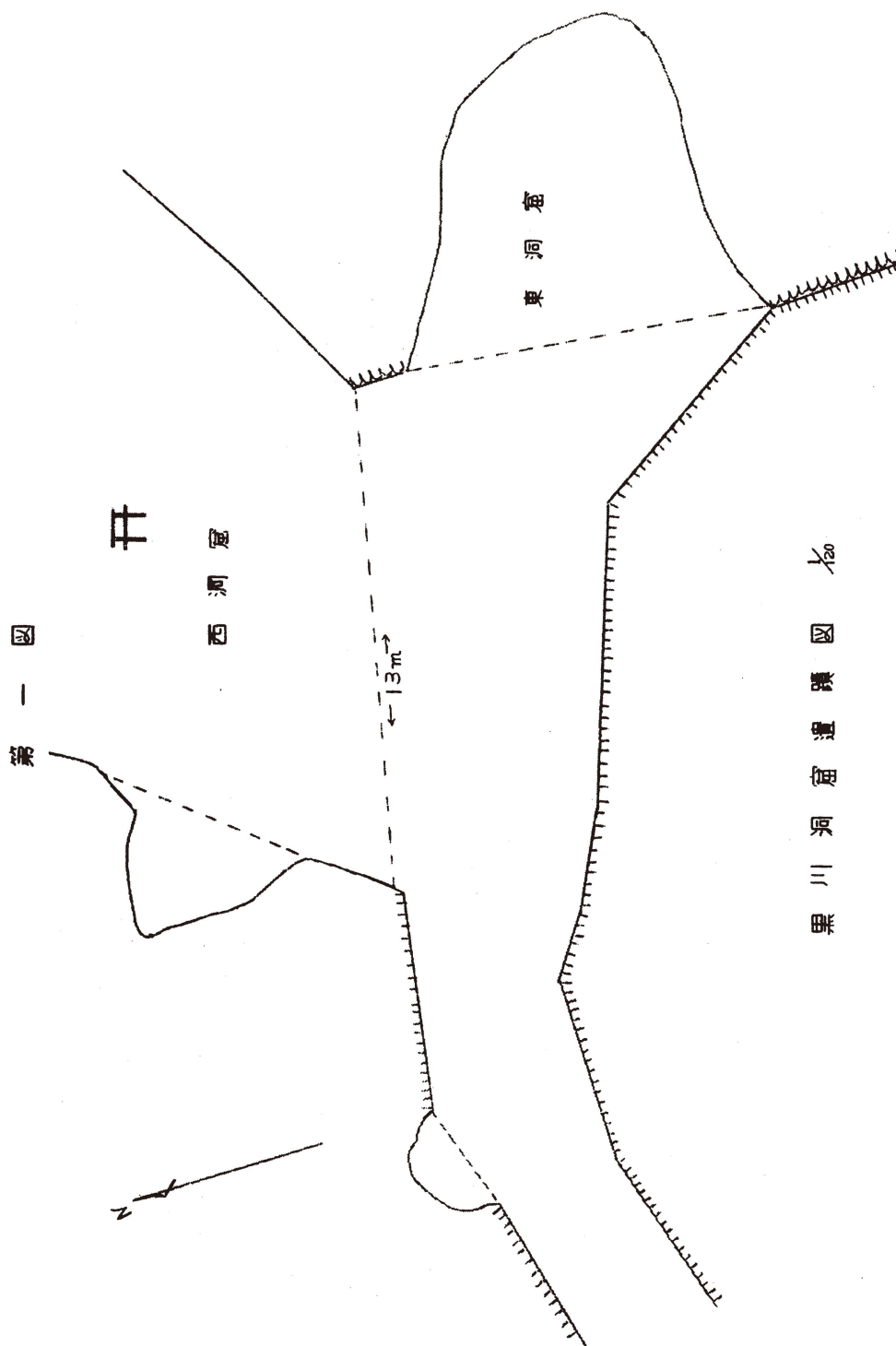
石庖丁はとくに溝を有する点で特徴のあるもので他にはこの様な出土例はあまり聞かないが金属器の影響を受けたものであろうか。朝鮮出土の石庖丁には同様の例がある。

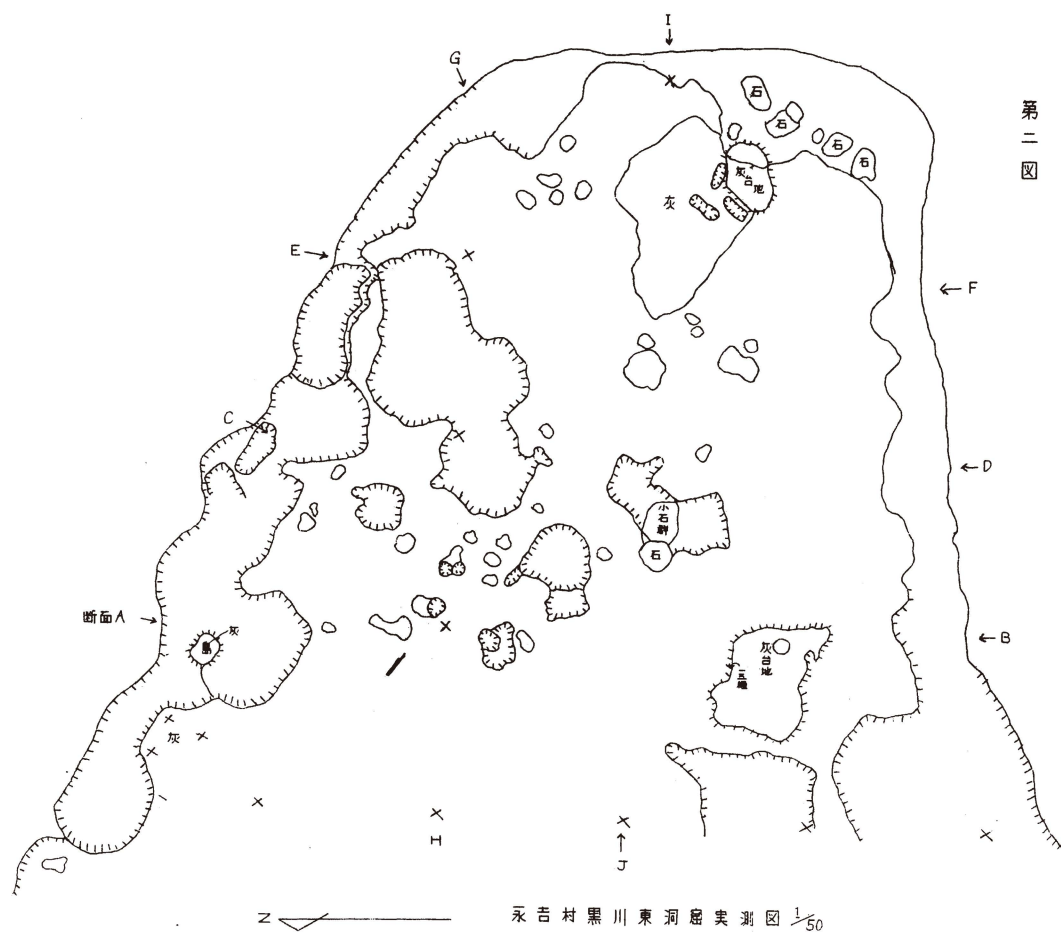
黒川洞窟発掘報告

河 口 貞 徳

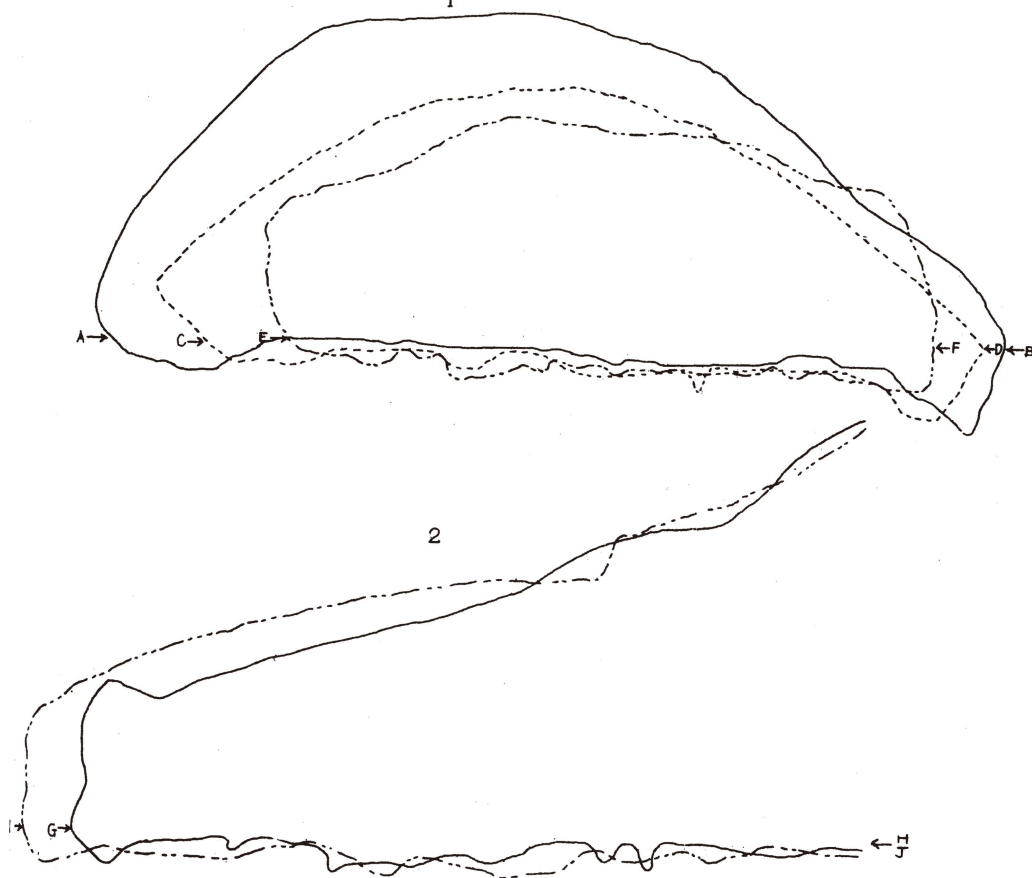
一 遺蹟の地形

日置郡永吉村柱野に在る。薩摩半島の基部に当り金峰山脈の西斜面標高100mの箇所である。永吉川の上流柱野川が西流して作ったV字状の細長い谷の北斜面にシラス層に出来た侵蝕による洞窟がいくつかあるその一つが本遺蹟である。西海岸吹上浜より6.5kmの距離にあって附近は平坦地なく極くせまい山田が柱野川に沿って少々あるだけの山地帯であって、他の市来





第三図
東洞窟断面図 1/50
1



式の遺蹟等が平坦地に位置している場合が多いのと少々趣きを異にしている。

洞窟はかなり急な傾斜の山腹に位置しており、土質は少々凝結した火山灰（シラス）に穿たれ、隣接して東西に並んで2ヶ所あり、西側のものが大きく、入口において巾13.3m、高さ約6mであって奥は岩塊崩落の為きわめる事が出来ないが相当に深い。各所に岩塊の崩落したものがあつた為入口の一部分（社殿のある所）を除いては凹凸が甚だしい。入口は南向きであるが穴の方向は東北である。（第一図）東側の洞窟は入口において巾11m、高さ4.35m、穴の深さ8.4mである。洞窟内は岩塊（土塊）の崩落なく平坦である。穴の方向は東西である。

西洞窟の前面は巾約2.5mの平坦な地があり、西側洞窟中に鎮座する黒川神社の前庭ともなり、また参詣の通路ともなっている。

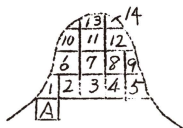
今回発掘したのは主として東側の小洞窟であるが西側洞窟の一部も遺物の有無及性質をたしかめる為試掘したのである。

二 調査・経過

昭和27年5月永吉村坊野小学校教官辻正徳氏より遺蹟の存在を報じて来たので同年6月14日調査におもむいたのであつた。先づ坊野小学校において蒐集せられた遺物を見せてもらった所、縄文式土器破片（西平、御領、市来、素文土器、みみずばれのはりつけ文土器——轟式か？）淡水産巻貝（川にな）ハマグリ、獣骨等の中に弥生土器1片を見出した。当日は雨天であつたがさっそく現地に案内してもらい、東側洞窟の調査を行った。貝及び獣骨の量少く且つ黄色を呈し普通の貝塚のそれと異なる事、土器中、素文土器の存在等に注意を引かれたのであつた。

三 発掘状況

昭和27年8月1日より8日に至る8日間、玉竜高等学校考古学部員、長瀬義明、村山義治、東明宏、松元俊一郎、川上四郎、上村俊雄、藤崎公人君等の手に依つて河口が責任者として発掘を行った。この外鹿大生有村君、太田泰正君、高野虎雄君、河野治雄氏等が発掘に援助してくれられた。尚宇多薩雄氏は発掘当日わざわざ同行して村役場に紹介してくだされ便宜をお計りくださった。発掘中は坊野小学校裁縫室に宿泊さしていただき、校長栗野丸実義氏始め阿田隼人、辻正徳氏等同校職員の御世話をしていただいた。又永吉村当局の御好意、玉竜校流馬計先生の御援助をいただいた事を併せ記して感謝の意を表わすものである。



発掘は、東側小洞窟について行った。洞窟内を東西と南北の線によって方2mに区画し、入口北端の区画を第1区とし北より南へ西より東へと番号を進め第1区より第14区迄とし、第1区西隣に更に1区を設けA区とした。

洞窟は前述の如く火山灰層（シラス）に出来た水の浸蝕による自然の洞窟であつて恐らく水滴が上壁（天井）より滴下していた時代があつたであろう。洞窟中央の天井には径約50cm程度の穴があり、上方に垂直に2m程延びて次第に狭くなって止っている。之は水蝕の跡を示すも

のと見られる。西側洞窟にあっては現在尚断層に沿って水が滴下して居り、又岩塊の崩落の跡が多く見られるのは水蝕が進行していることをしめすものであろう。

東側洞窟は現在全く水滴落下等の事はなく乾燥している。洞窟内壁面は一面に「こけ」におおわれており、加工の跡はみられない。

洞窟の形をここで再度記述すると、入口の巾 11 m、高さ 4.35 m 奥行き 8.4 m であって入口は広く奥へ狭く、平面形は、馬蹄形をなして居り、入口の中央が最も高く両側と奥へ次第に低くなっており、奥の最も天井の低い処で高さ 1.5 m である。(第二図、第三図参照)

底面は平坦で周壁に沿った部分は土がやわらかで、ぼこぼこしており坊野校生徒がこの部分から手探りで遺物を採集したものであった。

発掘の結果遺物の埋没状況からみて土砂の堆積が非常に少なく、平坦な床面の箇所では 10 cm — 13 cm 程の堆積を示して基盤の火山灰層(シラス)に達し、構築された溝穴等において遺物が元状をとどめている様な場所においても地表面より 25 cm 位の深さに止るのであって、堆積層が薄い。之は洞窟が出来て、ここに遺蹟が出来た後においては侵蝕があまり行なわれず従って土砂の崩落する様なこともなく、洞窟上壁(天井)の土が少量落下する程度に止った為であろう。

発掘について最も困難を感じたことは堆積層が薄く且つ攪乱されている場所があったことである。攪乱については三種類がある。第一は遺蹟が形成されつつある時に於いてすでに攪乱を受けたことである。それは縄文式時代の新古数種の形式を混在し旧い形式のものは攪乱を受けていることである。

第二は西洞窟、黒川神社が文明 3 年(三国名勝図絵による)ここに遷坐奉祀されて以来東洞窟も信仰の行事に使用されたのであって、表層に於いても焚火の跡があり又第 4 区においては 1 厘銭(寛永通宝)が出土したのであり又祭日の行事として、角力を行う際土俵を築いた事などである。

第三は坊野小学校生徒によって遺物が採集された際埋没していた石などが掘りをこされてしまったことである。以上の様な状況のもとに発掘を行ったのであるが部分的には攪乱を受けず原状を保つ場所があった。例えば第 6 区、第 13 区、第 12 区等であって、ここでは市来式と黒川式(仮称)との層位関係を知ることが出来たのである。

遺物の出土状況を見ると周壁に沿って出来た溝に最も多く、又入口より奥に出土量が多いことが認められた。

四 住 居 跡

この遺蹟発掘の結果周壁に沿って巾 50 cm — 100 cm 深さ 35 cm — 113 cm の溝がめぐらされており、これは北西端において浅く奥へ行くに従い深くなり南西端において最も深く谷へ向って開いているのである。これは恐らく排水溝の用をなしたものであろう。第二図に見られる様に、各所に大小の凸所が構築されており、その小穴は柱穴であろうと思われ、大きな穴には

第8区における凹所の如きは深さ41cmあり、その底部には小石を52—46cmの広さに敷きならべてあり、これ等の石は焼けて亀裂が入っており、石上及びその周辺の土の上に炭の粉末が相当に散布していた。これ等小石群の凹処壁上(18cm)にあった少々大きな石(30×20cm)及たたき石は凹所底部より2,3cm上部にあったのであるが焼けた痕跡を明瞭に残していたのであって之は炉として使用したものと思われる。

周溝(周囲の溝)中には土器が多く残され、又灰も多い。獣骨が風化せずに残されている処はほとんど灰の中に埋没している所にかざられている。

土器が原状を遺存している箇所が6区12区13区において最も著しく、これ等は深さ23cm—25cmに出土しており大形の甕形土器、浅鉢形土器等が相等に復元出来る程度のものであった。以上の事から考えて大体本遺蹟は住居跡とみてまちがいはないであろう。

貝類獣骨類も貝塚と出土状況が稍異なりその出土量が少いことも注意せられる点である。

その他遺蹟として注意される事項は14区周溝にかなり大きな石の配列がみられたがその意味は不明である。之以外にも石の配列はあったらしいが攪乱によって不明となった。

五 遺 物

＜自然遺物＞

自然遺物としては獣骨貝類がある。猪、鹿その他小動物貝類は川になが最も多く海水産のものもみられはまぐり、あこや貝、まるさるぼう、おきあさり、こべそまいまい、まつかさがい、こたまがい、たちちほまいまい、いたやがい、つめたがい、まくらがい、いしまき、おきしじみ、かがみがい、へたなり等が出土している。淡水産の巻貝と海産の貝とは出土の場所を異にしている。之は補食の時期の差異を示すものであろう。獣骨及貝類に白色で風化されていないものと黄色で稍風化されているものとあるが之は攪乱によって露出後再度埋没したものが風化を受けたものであろうと思われる。

＜人工遺物＞

骨、角、貝製品

骨針2個、貝輪若干、出土しているが至ってその数は少い。(第四図)

石製品

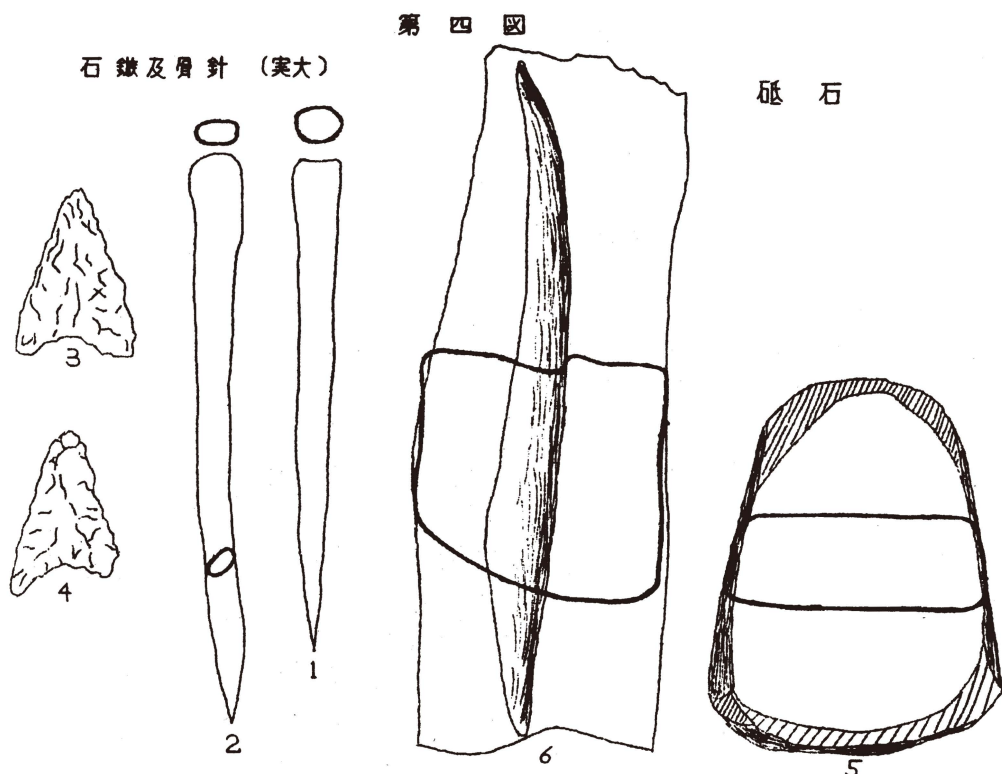
石鏃2個、石弾若干、砥石2(粗精各1、第四図5,6)磨石斧1が出土している。

土 器

この洞窟は前述の如く住居址であって出土の土器は数形式にわたっている。次にそれを上げれば曾畑式、はりつけ文土器、阿高式、出水式、指宿式、市来式、西平式、御領式と新形式の一群である。

曾畑式

比較的薄手の焼成良好な土器で細形の沈線文を施し、平行直線文、綾杉文、連点、羽状文等の文様があり、口縁部上面には刻目又は連点を附し口縁裏面迄文様を附している。少量の破片



が出土している。早期である。

はりつけ文土器

薄手。胎土は割に密で焼成良好である。口縁部は内部へ湾曲している。狭い粘土の紐をはりつけて波形の文様を形成している。内面に条痕を施したのものもある。本遺蹟では6個の破片が出土しているのみであるが、鹿児島市春日町岩崎邸の下層土器も同類である。新形式であるが中期の土器ではないかと思われる。(第五図参照)

阿高式

大形の凹線で曲線文様を施している。本遺蹟からは3個の破片を出土している。縄文中期である。

出水式(南福寺式)

阿高式に近いが文様帯が圧縮せられて口縁部の肥厚した部分にのみ施文したものである。本遺蹟では2個の破片を出土している。後期初頭のものであろう。

指宿式

二平行線を以て曲線文様を描いてある。文様帯は胴部に及んでいる。少量出土している。

市来式

口縁部に山形の隆起あるものと、水平口縁のものがある。口縁部が肥厚して断面は三角形

黒川第一 14

第五 図

はりつけ文土器拓本



をなす(く字状をなすものもある)肥厚部に文様を施しているが中には胴部に及ぶものがある。文様の種類は貝殻口縁による庄痕文、平行沈線文の始まりと終りに庄点を施したものの弧状の沈線文等がある。無文のものも相当にある。出土量は黒川式に次いで多量に出土しており、破片も少々大きく又その出土している場所は周溝に多い。黒川式に次いで大破片であり、且つままとまったものといえよう。

西平式

黒色、薄手で表面がよく研磨され、焼成良好堅緻である。口の開いた壺形が多く、口縁部と肩腹部の2箇所に数条の平行線を施し、線間に磨消縄文を附している。口縁部に山形隆起があり此の隆起の頂点下の中央及び肩腹部の平行線間に爪形文様を対向させる。底部は上り底である。この遺蹟の出土量は少ない。

御領式

黒色、研磨土器、焼成良好堅緻である。深鉢形、鉢形、甕形等。口縁は「く」字形を呈し、口縁部外面に平行線文を施している。

＜第一表 土器諸形式の出土区と数量＞

形式	発掘区	A	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	K	X	XI	XII	XIII	XIII	計	西洞
底 部	平 底	2	1				1		1	2	8	2		3	5	6	31	19
	くくれ底		2				2		2		3		1	3	2		15	
	上り底	1									1			2	2	2	8	
磨 研 土 器	黒 川	3	6	7				1	5	3	8	4	2	8	7	5	59	18
	西 平							1		2	1			5			9	
	御 領							2		2		1	1			2	8	
曾	畑		1				4		1	1	6	2	1	1		6	23	3
はりつけ	文												1		1	4	6	
市 来	有 文						4			1	3		1	2	3	4	18	15
	無 文	2					2		1	1	7	1	2	4	4	8	32	16
指	宿						1				1			1		2	5	2
黒	川	4	6(2)	3		3	5	7	5		13	22	11	16	10		95	
磨 研	片	7	14			4	14	5	20	17	28	27	18	39	10	22		8
破	片	27	71	29		7	72	57	69	65	160	135	165	170	102	129		158
そ の 他			リボン付2	石弾1			阿高1 不明1	石針1 石鏃2	出水1 貝輪1 リボン付1	直口5 貝輪1 石弾2	異形4 阿高1 石弾3	石弾1 凹文2 異形2 石弾1 骨針1	荒砥1 砥石1 異形1	異形1 市来変形2 沈文1 胴厚手1 石弾2	異形2 石弾1	出水1 阿高1 口縁波状内側 リボン付1	1 1 3 1	貝輪1 弥生5 リボン付2 出水1

黒川式

之には磨研されたものと粗製のものと二形式があり、他に類似の土器の出土がないので黒川式と名づけた。先づ磨研土器からのべよう。(第六図2,3,4,7,8)

この土器は粗製土器と共に量はこの遺蹟で最も多い(第一表参照)然し完形土器は出土していない。黒色薄手磨研土器で焼成良好であり、土質は精撰され、粒子が細かく、きわめて堅緻である。中には赤色に塗料を施したものがある。(第六図7)器形は胴張りで底部は上り底の様である。口縁部は外反し、口縁内面に凹線を施している。(第六図2,4,7)鉢形土器である。尚口縁内部の凹線の施してないものもある。(第六図8)皿形の土器は頸部が内部へ凹んでいる(第六図3)

粗製土器について述べる(第六図1,5,6)

口径30cm以上の大形の甕形及鉢形土器である。黒褐色粗製の土器で胎土は比較的密である。第六図5の土器の如く肩部が張り、頸部へ内曲して緊り口縁部へと外反したもので肩部から胴底部へ直線的に緊り底部は平底であるが底面縁部が外側へ、張り出しているのが特徴である。無文で貝殻の口縁によって条痕を附し、胴部以下は条痕が斜行して下っている。

鉢形も同様の底部であるが、変化のない単純な器形である。(第六図6)出土量は最も多く、出土の状況は完形に近く、まとまっており、遺蹟の原状をとどめており他の遺物が破片となつてばらばらに出土しているのと大いに異っている。之は黒川式土器を使用した人々が最後にこの遺蹟で生活した時の状況をとどめたものと判断せざるを得ない。

＜土器の年代＞

曽畑式は早期であり、はりつけ文の土器は春日町の遺蹟において阿高式の下層から出土しているので中期と思われる。

阿高は中期の後となり指宿は阿高に連絡のあることは形式的にも考えられ、田代村岩崎の上下両層の土器によって推定される。出水南福寺式は阿高式と指宿式の間であろう。市来式が指宿式のあとに来ることは層位的にも形式的にも明らかである。西平式が市来式と伴出することは普遍的な事実である。御領は西平より系統を引くものである事は明瞭である。黒川磨研土器は無文であつて、山形の隆起もなく御領にやや類似の器形をしめす土器もあるが、単純な形をしめし、平行沈線を失っている。之は御領より新しく縄文晩期とすべきものと思われる(資料が少く始めての出土で今後の研究を要する)

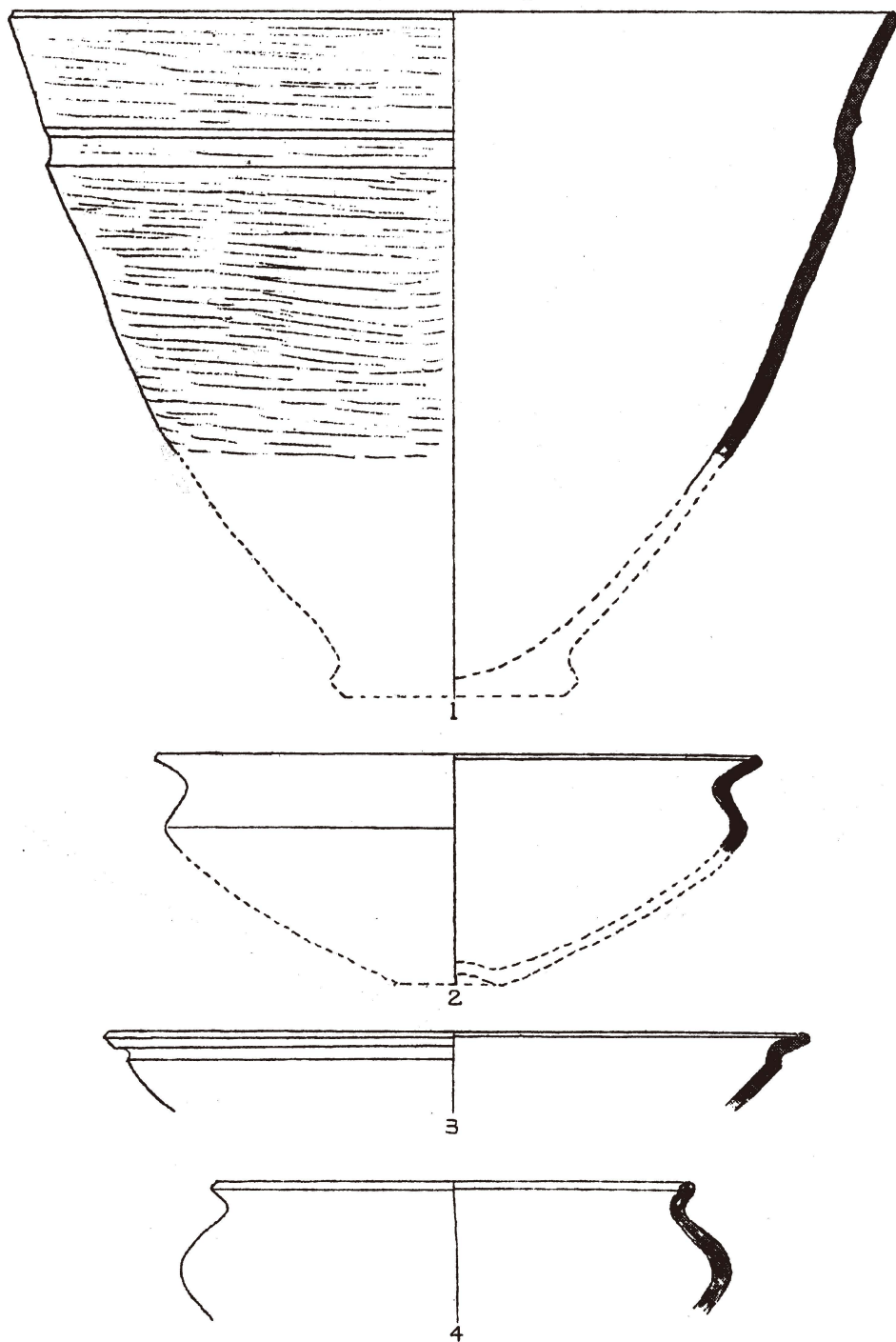
黒川粗製土器は谷山町草野貝塚の上層の無文土器の中に類似したものがあるが之は本遺蹟でも同様なものがみられるので、市来式の最後期とみるべきで直接黒川の粗製土器とのつながりは明瞭でない。器形等の上からみて晩期とすることが適当と思われる。

磨研土器と素質土器とは最少量の出土をみるもので同一のグループに入れるべきものであらうと思われる。

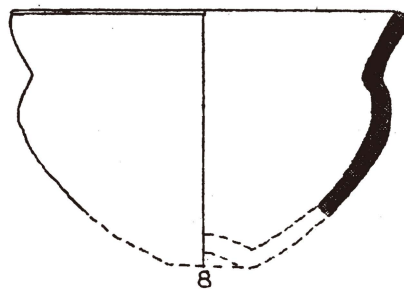
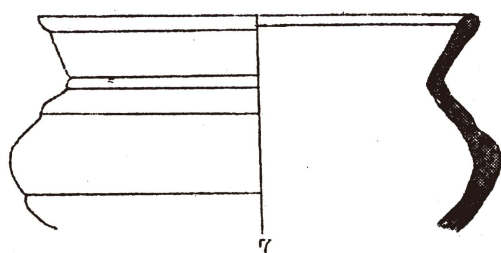
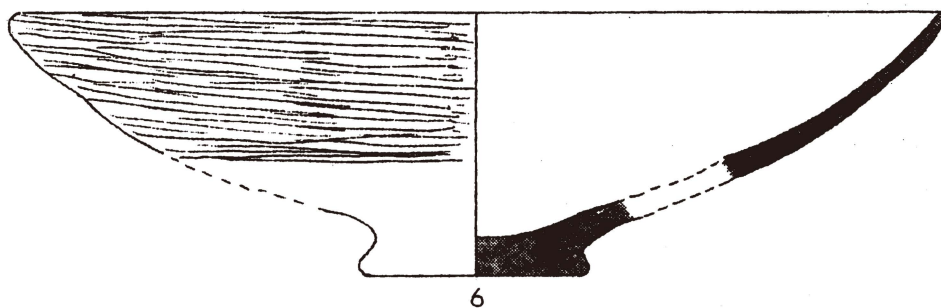
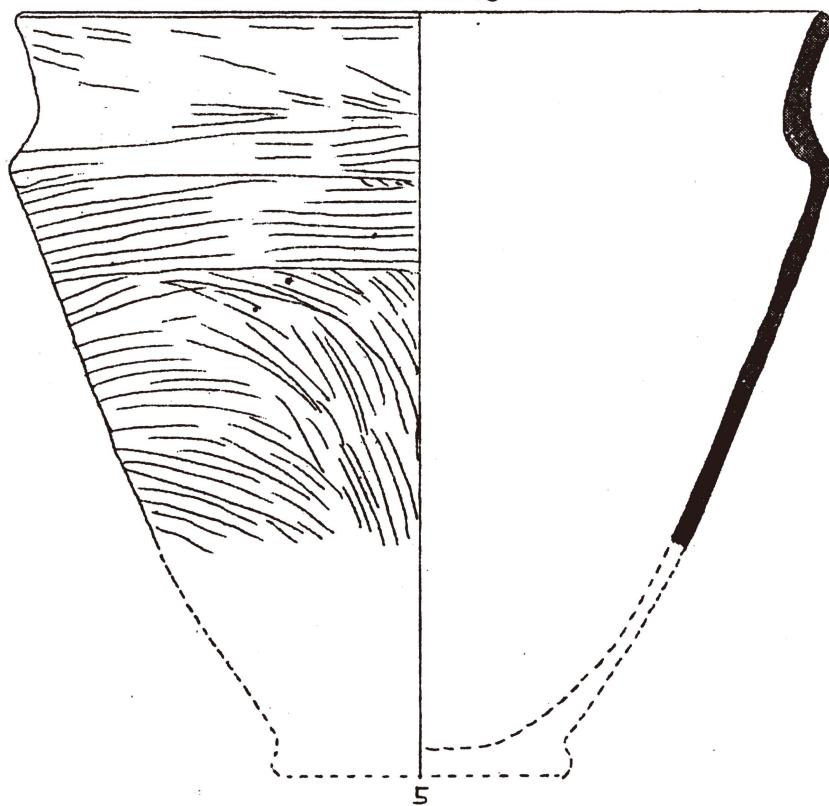
＜結 び＞

黒川遺蹟は洞窟遺蹟としてめずらしいばかりでなく、住居址として生活の跡をとどめている

第六圖 (1)
黒川新形土器 実測圖 為



第六圖 (2)
黒川新形式 土器 実測圖 為



点においても数少ない遺蹟の一つであろう。

しかも当時の住居形式である家屋形式をついだためか、あるいは洞窟の天井壁より水滴が落下したためか、柱穴、周溝の遺蹟があってこの中にはとくに多くの遺物をとどめていた。

獣骨と共に貝殻が出土している。淡水産を主としているが、場所によっては鹹水産の貝のみを出土し両者が混合していないことは時代によって捕食するところの物が変化したことを示すものといえよう。

本遺蹟は早期縄文時代より晩期縄文時代にわたる長期間の生活地域となっていたと思われる。

その間中途に一時生活しなくなった時期が何回かあったと思われるが、くりかえしここを住居地としたものであろう。

西側洞窟においては弥生式（遠賀川式）土器片を数片出土しており、又東洞窟においても坊野小学校生徒の採掘品中に1片の弥生式を発見しているので、弥生式時代の生活が始まらんとする時期迄生活していたものと思われ、縄文晩期を主体とする遺蹟である事が推定される。

本遺蹟の晩期縄文土器との関係遺蹟をたづねるならば、北九州において夜臼式なる縄文晩期の土器が発掘されているが、幾分の類似点をみとめる事が出来る。然し夜臼式にもっともよく類似した土器は指宿町大渡の遺蹟において少量出土しているようである。

晩期については今後調査をすすめる必要を感じる次第である。

種子島・屋久島

先史遺跡調査報告（二）

種子島・屋久島発見の石器

国 分 直 一

1

鹿児島県考古学会編の鹿児島県遺跡地名表によると種子島の遺跡としては、西之表農林学校（弥生式・石器）農事試験場（弥生式）西之表安城平山（弥生式・石器）西之表立山（弥生式・石器）中種子町坂井（弥生式）南種子町上中（石斧）中種子町熊野（弥生式）中種子町増田（弥生式）が記録されている。

以上の遺跡地名表には記載されていないが中種子苦浜から縄文土器が出土することについて河口貞徳氏より聞いている。

又、本夏、三友国五郎教授 河口貞徳氏と筆者が渡島調査するに及んで、遺跡はさらに豊富に分布すること及びその文化の様相においても縄文時代の初期より弥生式時代以後に及んでいる状